



TITLE:

図書館との4年間

AUTHOR(S):

CITATION:

図書館との4年間. 静脩 1965, 1(4): 4-4

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36246>

RIGHT:

われる。

2. 諸々の事情で昼休みに図書を借出す必要に迫られる学生は実に多いと思われるが、係の人の休憩時間は11時～12時、または1時～2時として便宜を計ってもらえないものか。

3. 10月や2月の試験期は、開架の書籍でも夜8時から朝9時の間館外帯出を認めたり（期限内に返さぬ者には以後の利用を拒絶する等の制裁を考える）、混雑のあまり閲覧者の席がなくなる時は一階の空いている部屋をこれにあてる等の試験期に対応した弾力的なサービスが考えられて当然ではなからうか？

4. 他人の引いた赤線で本が真赤に泣い

ていたり、ひどい場合には無惨にも重要箇所のみページぐち剥ぎ取られていたりして後の利用者は非常な迷惑を蒙っているが、図書が返却された時は一々汚損が加えられていないかをその場で検査し厳しく取締ってもらえないだろうか？

その他、新刊書をもっと早く利用出来るようにしてもらいたい、利用度の高い教科書類は複数購入してもらいたい、冬のストーブによる空気汚染に対してもっと有効な換気措置を講じてもらいたい等欲を云えばキリがないが、こういう不平に勝るとも劣らぬ程図書館への愛着や感謝を胸に抱いていることを強調しつつ擱筆することにする。

（法学部4回生）

II

奥田 秀毅

時の経つのははやい。もう卒業……。4年間何をし、何が残ったか？何も残らなかった。残念ながら「俺は大学時代にこれをやったんだ」と人に誇れるものはない。しかしこれでいいんだと思う。「予定のコースである」……と云い切れば嘘になるだろうが、満更嘘でもない。ぼくだって入学当初は勢いこんでいた。勉強もし有意義な充実した生活をしたと思った。何かスタンブレイも演じてみたかった。だが、やがて考えが変わってきた。大学在学中は意識的な blind days にしてやろうと。

そう思ってから生活が愉しくなった。勉強しなければならないと云う高校時代から続いていた圧迫感から逃れ得た。充実した生活をと云う緊張感から解放された。五月の空は青かった。それからいろんな事に食いついていった。紅灯の巷も歩いた、旅行もした、遊びも覚えた、工場で工具さんと共に働いたこともあった、恋愛もした、友人知己もたくさんできた。その間、人並みに悩み、苦しんだ、考えた。そして気が

つけば卒業が目前に控えていた。

大学生と云うものが専門知識を身につけていなければならないものとすれば、ぼくは完全に失格である。しかし、ぼくの当初の意図は大体果せた。ぼくでも努力することさえ忘れなければ人と十分伍していけるし、自分が先頭にたってやれば、そしてそれが意味のあることであれば人も自分についてくると云うことを肌で知ったことは大きな収穫であった。

ぼくの4年間の生活も今の平均の大学生の姿かもしれない。そこにはあまり大学図書館とのつながりはなかった。何が原因かをぼくなり分析しないでもないがすでに紙数はつきた。一言だけ述べたい。京大と云う大学の性質の問題も絡んでくるのだが図書館を学生のものにするか、大学院学生を始めとする研究者・学者を対象とするかを方針として決めることは必要だと思う。学生のものにするには教養部の図書室も本部の図書館も、ぼくの知る限りでは貧弱であった。そのために自分で買って読む方が手軽で便利だったし、おかげで本がたくさんたまったような次第である。

（薬学部4回生）